

# 特別支援教育に「予想外」を取り戻す

## —即興・自己表現・発達—

企画者・司会者  
話題提供者  
指定討論者

赤木和重（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科）  
村上公也（キミヤーズ塾）  
青山信吾（ノートルダム清心女子大学 人間生活学部）

KEY WORDS: 予測性, 再現性, 即興, 教育実践

### 【企画趣旨】

現在、わが国の特別支援教育では、予測性や再現性を重視した教育実践に価値が置かれるようになってきている（川田, 2015）。

確かに、学術雑誌に掲載されている実践研究を眺めれば、「子どもの実態把握を踏まえて、かかわりの方針を事前に設定し、方針に基づく実践の結果、予定通りの結果が得られ、子どもの行動が変容した」という定型的な語られ方をすることが多い。また、これは、実践研究という枠を超えて、特別支援教育の日々の実践に影響を与えている。

予測性と再現性を核とする特別支援教育、いわば「こうすればこうなる」的な教育が、専門性の高い教育実践とみなされつつある。子どもの行動を予測でき、かつ、再現可能性が高い手法をとっているからである。さらに、量的な指標を採用していれば、「エビデンス」という名のもとにより価値の高い教育実践とみなされる。

しかし、この予測性・再現性を核とする特別支援教育には、いくつかの問題がある。

1つは、「こうすれば、こうならなかった」事実は捨象されてしまうからである。「こうならなかった」事実は、修正すべき誤差とされ、日の目をみることがない。しかし、素朴に考えれば、私たちの日々の実践を振り返れば、「こうすればこうなる」ことのほうが少ないのではないだろうか。さらにいえば、「こうしても、こうならなかった」「こうしても、どうなるかわからない」といった予測不可能性こそ、教育的価値を見ることができるといえる。なぜなら、その「誤差」にこそ、子どもの表現や創造性、発達の息吹が隠されているからだ。

2つは、教育活動の陳腐化が危惧される点である。例えば、松井（2003）は、障害児保育の場において、保育の目的と計画が優先されることで、遊びが発達のための「手段」として位置づけられ、遊びそのものの楽しさが失われ、皮肉にも、発達の芽をつままれることを、いくつかのエピソードから指摘している。

以上の問題意識に基づき、本シンポジウムでは、教育実践における「予想外」の意味・意義を取り戻し、硬直化しつつある特別支援教育に一石を投じることを目的とする。

話題提供者を、村上公也先生にお願いした。氏は、障害児同士の「ノリツッコミ」「うんち語文字」などユニークな実践を展開されてきた。その根底にあるのは、子ども自身の創造的な自己表現を重視する姿勢である。

指定討論者を、青山信吾先生にお願いした。青山先生からは、様々な学校現場および教育実践にかかわられた経験から、「予想外」の意味について、コメントいただく予定である。

### 【話題提供者の趣旨】

特別支援教育ではインクルーシブ、ユニバーサルデザイン、アクティブラーニングなど、流行のファッション用語と見紛うほどのカタカナが躍る。学会や研究会では指導のアルゴリズムが図式化されフローチャートで表され、先進性と成果の程を競って、実しやかにエビデンスをうたい、出来レースのような指導マニュアルが作成される。学校現場は時代に乗り遅れることを恐れ、具体的な成果に縛られ身動きがとれず、どんどん委縮しているように見える。

特別支援教育こそ教育の原点と言われて久しいのに、今や目先の成果主義に席卷され、教育たる原形をとどめなくなっている。知識・技術を如何に効率的に教え込むかが要件になり、また日常の立ち居振る舞いの不自然さを無くすために「ダメでしょ」「～してはいけません」と否定的な指示語で外見の態度を矯正する指導が行われる。

現実にはアセスメント、指導計画、エビデンス、分析、PDCAでさえ同時に起こっていて、それらを一つずつ部分に分け、改善して再構築しても、善き全体にはならない。授業は再現不能の即興なのである。実際すべて、ゴチャ混ぜに同時に起こっている。新しい観点で教育を捉える必要があるのではないだろうか。

そこで、人との関わりで互いに影響し合い、自ら試行錯誤するダイナミズムの中で、イメージしたり、発見したり、創造したり、表現したりする活動内容の「飛んで仮名文」などの教材をビデオなど交えて提案する。これは子どもも指導者も参観者さえ巻き込み、楽しみ、考え、つながっていく予測不能のインスタレーションを満喫するオリジナルの教材である。

実際の授業は圧倒的に複雑系であり、絶えず予想外のことが起こる。上辺の成果を求める偏った視線では見えない領域がある。その領域こそ重要で人生を豊かにするのではないだろうか。

### （参考文献）

川田 学（2015）心理学的子ども理解と実践的子ども理解：実践者を不自由にする「まなざし」をどう中和するか 障害者問題研究, 43, 178-185.

松井剛太（2013）保育本来の遊びが障害のある子どもにもたらす意義：「障害特性論に基づく遊び」の批判的検討 保育学研究, 51, 295-306.

村上公也・赤木和重（2011）キミヤーズの教材・教具：知的好奇心を育てる クリエイティブかもがわ

青山新吾（2013）エピソードで語る教師力の極意 明治図書

（AKAGI Kazushige, MURAKAMI Kimiya, AOYAMA Shingo）